

猛兽

川崎ゆきお

A社内とB社内に担当者がいる。業務は同じだ。

有川は両方を仕事で訪れる。

A社はいいが、B社は苦手だった。担当者の違いで、その差が発生する。

A社の人とはすんなりいくのだが、B社では時間がかかる。

「納期に間に合って当たり前。今回は無事だったけど、ギリギリじゃなかったの？」とか、余計なことをB社の人は言うてくる。

A社の人にはそれがない。そっけないが簡単に仕事が終わる。

B社の人たまには飲みに行かないかと誘ってくる。プライベートな付き合いを強要される。断っても問題はないが、何度も誘われると辛い。毎回断るのが辛いのだ。

一度飲みに行ったことがある。顔はいかついが気さくな人で、社内の諸々の裏事情まで教えてくれる。

有田は得意先の担当者とのプライベートな付き合いということで、自腹を切って飲み代を払うが、安い店なので大した額ではない。

「仕事って、人と人の関係でできているんだよ。そう思うだろ」

「そうですねえ」

「だから、こういうことが大事なんだ。あんたの前の人はねえ、そういうことに気が回らなくてさあ、だから、あんたに替わったんじゃない？」

「そういうわけではないですが、宮内は役付きになり、外は回らなくなっただけです」

「それは意外だなあ。あんな奴ほど出世するんだ。うちにもいるよ、不人情な奴ほど出世するんだ」

B社の人好物のキスの天麩羅を食べながら、綿々と語り続けた。

有田はその経験から、二度と一緒に飲みに行くまいと思った。悪い人ではないのだが、そのペースについて行けなかったのだ。

A社の人、そんなことをしなくても仕事はスムーズだった。

この違いは何だろうかと有田は考えた。担当者の違いで、これだけの幅がある。

上司に相談すると、人柄の違いだけらしい。

「語りが多い人がいるんですよ。人間通の人でね、余計なことまでペラペラ喋らないと気がすまない動物なんですよ」

「動物なんですか？」

「吠えたり、唸ったり...と、まあ猛獣ですよ」

有田はA社の人顔が老いて薄汚れたライオンのように見えた。

了